

六の宮の姫君

芥川龍之介



六の宮の姫君の父は、古い宮腹みやばらの生れだつた。が、時勢にも遅れ勝ちな、昔氣質むかしかたぎの人だつたから、官も兵部大輔ひやうぶのたいふより昇あがらなかつた。姫君はさう云ふ父母ちちははと一しよに、六の宮のほとりにある、木高こだかい屋形やかたに住まつてゐた。六の宮の姫君と云ふのは、その土地の名前に拠よつたのだつた。

父母は姫君を寵愛ちゆうあいした。しかしやはり昔風に、進んでは誰にもめあはせなかつた。誰か云ひ寄る人があればと、心待ちに待つばかりだつた。姫君も父母の教へ通り、つつましい朝夕を送つてゐた。それは悲しみも知らないと同時に、喜びも知らない生涯だつた。が、世間見ずの姫君は、格別不満も感じなかつた。「父母さへ達者でゐてくれれば好い。」——姫君はさう思つてゐた。

古い池に枝垂しだれた桜は、年毎に乏しい花を開いた。その内に姫君も何時いつの間にか、大人寂おとなさびた美しさを具へ出した。が、頼みに思つた父は、年頃酒を過あやごした為に、突然故人になつてしまつた。のみな

らず母も半年ほどの内に、返らない歎きを重ねた揚句、とうとう父の跡を追つて行つた。姫君は悲しいと云ふよりも、途方に暮れずにはゐられなかつた。實際ふところ子の姫君にはたつた一人の乳母うばの外に、たよるものは何もないのだつた。

乳母はけなげにも姫君の為に、骨身を惜まらず働き続けた。が、家に持ち伝へた螺鈿らでんの手筥てぼこや白がねの香炉は、何時か一つづつ失はれて行つた。と同時に召使ひの男女も、誰からか暇をとり始めた。姫君にも暮らしの辛い事は、だんだんはつきりわかるやうになつた。しかしそれをどうする事も、姫君の力には及ばなかつた。姫君は寂しい屋形の対たいに、やはり昔と少しも變らず、琴を引いたり歌を詠よんだり、単調な遊びを繰返してゐた。

すると或秋の夕ぐれ、乳母は姫君の前へ出ると、考へ考へこんな事を云つた。

「甥おひの法師の頼みますには、丹波たんばの前司げんじにながしの殿が、あなた様に会はせて頂きたいとか申して居るさうでございます。前司はかたちも美しい上、心ばへも善いさうでございますし、前司の父も受領ずりやうとは

申せ、近い^{かんだらめ}上達部の子でもございますから、お会いになつては如何^{いかに}でございませう？ かやうに心細い暮しをなさいますよりも、少しは益^ましかと存じますか。……」

姫君は忍^ねび音に泣き初めた。その男に肌身を任せるのは、不如意な暮しを扶^{たす}ける為に、体を売るのも同様だつた。勿論それも世の中には多いと云ふ事は承知してゐた。が、現在さうなつて見ると、悲しさは又格別だつた。姫君は乳母と向き合つた儘、葛^{くず}の葉を吹き返す風の中に、何時までも袖を顔にしてゐた。……

二

しかし姫君は何時の間にか、夜毎に男と会ふやうになつた。男は乳母の言葉通りやさしい心の持ち主だつた。顔かたちもさすがにみやびてゐた。その上姫君の美しさに、何も彼^かも忘れてゐる事は、殆^{ほとん}誰の目にも明らかだつた。姫君も勿論この男に、悪い心は持たなかつた。時には頼もしいと思ふ事もあつ

た。が、蝶^{てふとり}鳥の几帳を立てた陰に、燈台の光を眩^{まぶ}しがりながら、男と二人むつびあふ時にも、嬉しいと一夜も思はなかつた。

その内に屋形は少しづつ、花やかな空気を加へ初めた。黒棚^{すだれ}や簾も新たに成り、召使ひの数も殖^ふえたのだつた。乳母は勿論以前よりも、活^いき活^いきと暮しを取り賄^{まかな}つた。しかし姫君はさう云ふ変化も、寂しさうに見てゐるばかりだつた。

或^{しぐれ}時雨の渡つた夜、男は姫君と酒を酌^くみながら、丹波の国にあつたと云ふ、気味の悪い話をした。出雲^{いづも}路へ下る旅人が大江山の麓に宿を借りた。宿の妻は丁度その夜、無事に女の子を産み落した。すると旅人は生家^{うぶや}の中から、何とも知れぬ大男が、急ぎ足に外へ出て来るのを見た。大男は唯「年は八歳、命は自害」と云ひ捨てたなり、忽^{たちま}ち何処^{どこ}かへ消えてしまつた。旅人はそれから九年目に、今度は京へ上る途中、同じ家に宿つて見た。所が實際女の子は、八つの年に変死してゐた。しかも木から落ちた拍子に、鎌^とを喉^{のど}へ突き立ててゐた。——話は大体かう云ふのだつた。姫君はそれを聞いた時に、宿命のせ

んなさに脅おびされた。その女の子に比べれば、この男を頼みに暮してゐるのは、まだしも仕合せに違ひなかつた。「なりゆきに任せる外はない。」——姫君はさう思ひながら、顔だけはあでやかにほほ笑んでゐた。

屋形の軒に当つた松は、何度も雪に枝を折られた。姫君は昼は昔のやうに、琴を引いたり双六むすくを打つたりした。夜は男と一つ褥しとねに、水鳥の池に下りる音を聞いた。それは悲しみも少いと同時に、喜びも少い朝夕だつた。が、姫君は不相変あひかわらず、この懶い安らかさの中に、はかない満足を見出してゐた。

しかしその安らかさも、思ひの外急ほかに尽きる時が来た。やつと春の返つた或夜、男は姫君と二人になると、「そなたに会ふのも今宵こよひぎりぢや」と、云ひ悪くさうに口を切つた。男の父は今度の除目ぢもくに、陸奥むつの守かみに任ぜられた。男もその為ために雪の深い奥へ、一しよに下らねばならなかつた。勿論姫君と別れるのは、何よりも男には悲しかつた。が、姫君を妻にしたのは、父にも隠してゐただから、今更打ち明ける事は出来悪できにくかつた。男はため息をつきながら、

長々とさう云ふ事情を話した。

「しかし五年たてば任終にんはてぢや。その時を楽しみに待つてたもれ。」

姫君はもう泣き伏してゐた。たとひ恋しいとは思はぬまでも、頼みにした男と別れるのは、言葉には尽せない悲しさだつた。男は姫君の背を撫でては、いろいろ慰めたり励ましたりした。が、これも二言目には、涙に声を曇らせるのだつた。

其処へ何も知らない乳母は、年の若い女房たちと、銚子ちうしや高坏たかづきを運んで来た。古い池に枝垂しだれた桜も、蕾つぼみを持つた事を話しながら。……

三

六年目の春は返つて来た。が、奥へ下つた男は、遂に都へは帰らなかつた。その間に召使ひは一人も残らず、ちりぢりに何処かへ立ち退のいてしまふし、姫君の住んでゐた東の対たいも或年の大風に倒れてしまつた。姫君はそれ以来乳母と一しよに侍さむらひの廊を住居すまひにしてゐた。其処は住居と云ふものの、手狭でもあ

れば住み荒してもあり、僅に雨露の凌げるだけだった。乳母はこの廊へ移つた当座、いたはしい姫君の姿を見ると、涙を落さずにはゐられなかつた。が、又或時は理由もないのに、腹ばかり立ててゐる事があつた。

暮しのつらいのは勿論だつた。柵の厨子はどうの昔、米や青菜に變つてゐた。今では姫君の袿や袴も身についてゐる外は残らなかつた。乳母は焚き物に事を欠けば、立ち腐れになつた寝殿へ、板を剥ぎに出かける位だつた。しかし姫君は昔の通り、琴や歌に気を晴らしながら、ぢつと男を待ち続けてゐた。するとその年の秋の月夜、乳母は姫君の前へ出ると、考へ考へこんな事を云つた。

「殿はもう御帰りにはなりませんまい。あなた様も殿の事は、お忘れになつては如何でございませう。就てはこの頃或典藥之助が、あなた様にお会はせ申せと、責め立てて居るのでございませうが、……」

姫君はその話を聞きながら、六年以前の事を思ひ出した。六年以前には、いくら泣いても、泣き足りない程悲しかつた。が、今は体も心も余りにそれ

は疲れてゐた。「唯静かに老い朽ちたい。……その外は何も考へなかつた。姫君は話を聞き終ると、白い月を眺めたなり、懶げにやつれた顔を振つた。「わたしはもう何も入らぬ。生きようとも死なうとも一つ事ぢや。……」

*

*

*

丁度これと同じ時刻、男は遠い常陸の国の屋形に、新しい妻と酒を斟んでゐた。妻は父の目がねにかなつた、この国の守の娘だつた。

「あの音は何ぢや?」

男はふと驚いたやうに、静かな月明りの軒を見上げた。その時なぜか男の胸には、はつきり姫君の姿が浮んでゐた。

「栗の実が落ちたのでございませう。」
常陸の妻はさう答へながら、ふつつかに銚子の酒をさした。

四

男が京へ歸つたのは、丁度九年目の晩秋だつた。

男と常陸の妻の族と、——彼等は京へはひる途中、日からの悪いのを避ける為に、三四日粟津に滞在した。それから京へはひる時も、昼の目目に立たないやうに、わざと日の暮を選ぶ事にした。男は鄙ひなにゐる間も、二三度京の妻のもとへ、懇ねんじろな消息をこつづけてやつた。が、使つかが帰らなかつたり、幸ひ帰つて来たと思へば、姫君の屋形がわからなかつたり、一度も返事は手に入らなかつた。それだけに京へはひつたとなると、恋しさも亦一層ひとしほだつた。男は妻の父の屋形へ無事に妻を送りこむが早い、旅仕度も解とかず六の宮へ行つた。

六の宮へ行つて見ると、昔あつた四足の門も、檜皮葺ひだぶきの寝殿や対たいも、悉ことごとく今はなくなつてゐた。その中に唯残つてゐるのは、崩れ残りの築土だけだつた。男は草の中に佇たえずんだ儘、茫然と庭の跡を眺めまはした。其処には半ば埋もれた池に、水葱なぎが少し作つてあつた。水葱はかすかな新月の光に、ひつそりと葉を簇むららせてゐた。

男は政所まんどらと覺おぼしいあたりに、傾いた板屋のあるのを見つけた。板屋の中には近寄つて見ると、誰か人

影もあるらしかつた。男は闇を透すかしながら、その人影に声をかけた。すると月明りによるぼひ出たのは、何処か見覚えのある老尼だつた。

尼は男に名なのられると、何も云はずに泣き続けた。その後やつと途切れ途切れに、姫君の身の上を話し出した。

「御見忘れでもございませうが、手前は御内みうちに仕へて居つた、はした女の母でございませう。殿がお下りになつてからも、娘はまだ五年ばかり、御奉公致して居りました。が、その内に夫と共々、但馬たじまへ下る事になりましたから、手前もその節娘と一しよに、御暇おいとまを頂いたのでございませう。所がこの頃姫君の事が、何かと心にかかりますので、手前一人京へ上つて見ますと、御覧の通り御屋形も何もなくなつて居るのでございませうか？ 姫君も何処へいらつしやつた事やら、——実は手前もさき頃から、途方に暮れて居るのでございませう。殿は御存知もございませうが、娘が御奉公申して居つた間も、姫君のお暮しのおいたはしきは、申しやうもない位でございませう。……」

男は一部始終を聞いた後、この腰の曲つた尼に、下の衣を一枚脱いで渡した。それから頭を垂れた儘、黙然と草の中を歩み去つた。

五

男は翌日から姫君を探しに、洛中らくちゆうを方々歩きまはつた。が、何処へどうしたのか、容易に行き方はわからなかつた。

すると何日か後の夕ぐれ、男はむら雨さめを避ける為に、朱雀門すざくもんの前にある、西の曲殿まげでんの軒下に立つた。其処にはまだ男の外にも、物乞ひらしい法師が一人、やはり雨止みを待ちわびてゐた。雨は丹塗りの門の空に、寂しい音を立て続けた。男は法師を尻目にしながら、苛立いらだたしい思ひを紛まぎらせたさに、あちこち石畳みを歩いてゐた。その内にふと男の耳は、薄暗い窓の櫺れんじの中に、人のゐるらしいけはひを捉へた。男は殆ほとんどの気なしに、ちらりと窓を覗いて見た。

窓の中には尼が一人、破れた筵むしろをまとひながら、

病人らしい女を介抱してゐた。女は夕ぐれの薄明りにも、無気味な程や瘦せ枯れてゐるしかつた。しかしその姫君に違ひない事は、一目見ただけでも十分だつた。男は声をかけようとした。が、浅ましい姫君の姿を見ると、なぜかその声が出せなかつた。姫君は男のゐるのも知らず、破れ筵の上に寝反りを打つと、苦しきうにこんな歌を詠よんだ。

「たまぐらのすきまの風もさむかりき、身はならはしもののにざりける。」

男はこの声を聞いた時、思はず姫君の名前を呼んだ。姫君はさすがに枕を起した。が、男を見るが早いか、何かかすかに叫んだきり、又筵の上に俯伏うつぶしてしまつた。尼は、——あの忠実な乳母は、其処へ飛びこんだ男と一しよに、慌あわてて姫君を抱き起した。しかし抱き起した顔を見ると、乳母は勿論男さへも、一層慌てずにはゐられなかつた。

乳母はまるで気の狂つたやうに、乞食法師のもとへ走り寄つた。さうして、臨終の姫君の為に、何なりとも経を読んでくれと云つた。法師は乳母の望み通り、姫君の枕もとへ座を占めた。が、経文を誦とく誦誦

する代りに、姫君へかう言葉をかけた。

「往生は人手に出来るものではござらぬ。唯御自身怠らずに、阿弥陀仏の御名をお唱へなされ。」

姫君は男に抱かれた儘、細ぼそと仏名を唱へ出した。と思ふと恐しさうに、ちつと門の天井を見つめた。

「あれ、あそこに火の燃える車が。……」

「そのやうな物にお恐れなさるな。御仏さへ念ずればよろしうござる。」

法師はやや声を励ました。すると姫君は少時の後、又夢うつつのやうに眩き出した。

「金色の蓮華が見えます。天蓋のやうに大きい蓮華が。……」

法師は何か云はうとしたが、今度はそれよりもさきに、姫君が切れ切れに口を開いた。

「蓮華はもう見えませぬ。跡には唯暗い中に風ばかり吹いて居りまする。」

「一心に仏名を御唱へなされ。なぜ一心に御唱へなさらぬ？」

法師は殆ど叱るやうに云つた。が、姫君は絶え入

りさうに、同じ事を繰り返すばかりだった。

「何も、——何も見えませぬ。暗い中に風ばかり、——冷たい風ばかり吹いて参りまする。」

男や乳母は涙を呑みながら、口の内に弥陀を念じ続けた。法師も勿論合掌した儘、姫君の念仏を扶けてゐた。さう云ふ声の雨に交る中に、破れ筵を敷いた姫君は、だんだん死に顔に變つて行つた。……

六

それから何日か後の月夜、姫君に念仏を勧めた法師は、やはり朱雀門の前の曲殿に、破れ衣の膝を抱へてゐた。すると其処へ侍が一人、悠々と何か歌ひながら、月明りの大路を歩いて来た。侍は法師の姿を見ると、草履の足を止めたなり、さりげないやうに声をかけた。

「この頃の朱雀門のほとりに、女の泣き声があるさうではないか？」

法師は石畳みに蹲まつた儘、たつた一言返事をした。

「お聞きなされ。」

侍はちよつと耳を澄ませた。が、かすかな虫の音の外は、何一つ聞えるものもなかつた。あたりには唯松の匂が、夜気に漂つてゐるだけだつた。侍は口を動かさうとした。しかしまだ何も云はない内に、突然何処からか女の声が、細そぼそと歎きを送つて来た。

侍は太刀に手をかけた。が、声は曲殿の空に、一しきり長い尾を引いた後、だんだん又何処かへ消えて行つた。

「御仏を念じておやりなされ。——」

法師は月光に顔を擡もたげた。

「あれは極楽も地獄も知らぬ、腑ふ甲が斐ひない女の魂でござる。御仏を念じておやりなされ。」

しかし侍は返事もせず、法師の顔を覗きこんだ。と思ふと驚いたやうに、その前へいきなり両手をついた。

「内記ないぎの上人しやうにんではございませんか？ どうして又このやうな所に——」

在俗の名は慶けい滋しの保胤やすたね、世に内記の上人と云ふ

のは、空也上人の弟子の中にも、やん事ない高德の沙門しゃもんだつた。

(大正十一年七月)

底本：「現代日本文学大系 43 芥川龍之介集」筑摩書房

1968（昭和 43）年 8 月 25 日初版第 1 刷発行

入力：j.utiyama

校正：林めぐみ

1998 年 12 月 2 日公開

2004 年 3 月 16 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。